

月刊 民族 5月号 2025



ふしぎな薬草カタカズラ

おかだ じゅん
岡田 淳

児童文学作家

プロフィール
1947年兵庫県生まれ。神戸大学教育学部美術科を卒業後、38年間小学校の図工教師をつとめる。1979年作家デビュー。『雨やどりはすべり台の下で』(偕成社)で産経児童出版文化賞、「こそあどの森の物語」シリーズ(全12巻、理論社)1〜3の三作品で野間児童文芸賞、国際アンデルセン賞オナーリスト選定、シリーズ番外編『こそあどの森のおとなたちが子どもだったころ』(理論社)で産経児童出版文化賞大賞受賞。他に『二分間の冒険』(偕成社)、絵本に『ネコとクラリネットふき』(クレヨンハウス)、エッセイ集『図工準備室の窓から』(偕成社)などがある。

三 十年前から「こそあどの森の物語」というシリーズ(理論社)を書き続けている。この森

でもなければ、その森でもない、あの森でもなければ、どの森でもないというのが、こそあどの森だ。

この森で薬草といえ、ガラス瓶の家に住んでいるスミレさんである。幼いころ、森のおばあさんに

薬草についての手ほどきを受けた。だから、熱をさます薬とか、のどの湿布の薬草とか、咳をとめる薬

などはお手の物だ(「こそあどの森のひみつの場所」)。

物語には、ふしぎな薬草もときどき出てくる。強力な眠り薬になるアマヨモギや、魔女をやっつける

月光草(『まよなかの魔女の秘密』)、ひと晩で傷を跡形もなく治してしまうアカネビワ(「こそあどの森のおとなたちが子どもだったころ」とかである。

しかしなんといつても、変わっているのはカタカズラという植物だろう(『ミュージカルスパイス』)。

花は雪の結晶のような六角形で空色、実は星の形の五角形、葉は三日月の形。ツル植物で、そのツルが

とても固い。だからカタカズラという。カタカズラの実を粉に挽くとできるのが、ミュージカルスパイス。

このスパイスを飲み物にでも食べ物にでもふりかけて口にとると、世界がミュージカルの舞台になって

しまう。まわりがミュージカルのように見えるだけではなく、自分も演じてしまうのだ。お芝居のように

気のきいたセリフをしゃべってしまったり、見えないはずの照明の光を感じ、聞こえないはずの伴奏

の音楽が聞こえてしまったり、初めての曲が歌えたり、踊れたりしてしまうのである。

——それって、ある種の覚醒剤じゃない？

などと思っではいけない。なぜなら、ミュージカル

スパイスを口にしたその場の者全員が、おなじ照明

の光を見、おなじ伴奏を聞き、練習してきたかのよう

におなじ歌詞を歌え、だれかの歌にハモってパッ

クコーラスをつけることもできれば、おなじ振り付けで

踊ることさえできるのだ。「ある種の覚醒剤」が自分という意識も責任もなくした個人的な幻覚で

あるの比較的、ミュージカルスパイスは自分という意識を保ちながら、みんなで力をあわせて創りあげるミュージカルの出演者になった気分が味わえるのだから、愉快このうえない。そう思いませんか？

12 みんなく回覧板

14 推しコレ図鑑
わたし、エレキの味方です
堤 邦彦

16 ふらりミュージアム
トランシルヴァニア民族誌博物館
新免 光比呂

17 世界の「乗っちゃえ!」
エンジンが変える森の日常
河合 文

18 だって調査だもの
被災地の空を飛び交うツバメの未来
宮原 修

20 ばくっ!とフィルめし
モンゴルの「薬肉」文化
島村 一平

21 今月号の地図・編集後記

1 巻頭エッセイ
ふしぎな薬草カタカズラ
岡田 淳

特集 薬草

2 薬になる毒を作る植物の生存戦略
山崎 真巳

3 日常の薬草ドリンク
杉野 好美

5 アマゾンのほれ薬
大橋 麻里子

6 修道院の薬草魔女
河西 瑛里子

7 薬草をめぐるフィールドワーク
伊藤 美千穂

8 薬草は誰のもの?
中空 萌

10 教えて! 推し薬草

月刊 みんなく

2025年 5月号

表紙

ローマンカモミール
学名: *Chamaemelum nobile*
出典: 『ケララーの薬用植物』(Missouri Botanical Garden, Peter H. Raven Library蔵)

*本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

表1 いくつかの生物のI型トポイソメラーゼのアミノ酸配列の違い

	アミノ酸番号	361	363	364	367	418	420	421	502	503	530	533	619	722	725	729
カンプトテシンを 生産しない生物	ヒト	F	G	R	H	E	I	Q	V	G	L	D	Y	N	D	T
	シロイヌナズナ	F	G	R	H	D	I	N	V	G	L	D	Y	N	D	T
	ニチニチソウ	F	G	R	H	D	I	N	V	G	L	D	Y	N	D	T
カンプトテシンを 生産する植物	チャボイナモリ	F	G	R	H	D	V	N	V	G	I	D	Y	S	D	T
	キジュ	F	G	R	H	D	I	K	V	G	L	D	Y	S	D	T

※アルファベットはアミノ酸の略称。例えばアスパラギン酸はN、セリンはSとあらわされる
(PNAS[米国科学アカデミー紀要]2008年を元に作成)

のだ。キジュは人間のために薬を作るのではなく、自らの生存のために毒を作って放出していたのだ。これを見てキジュはなぜ自分の毒で枯れないのか疑問に思った。

なぜ自分の「毒」で枯れないのか

興味深いことに、キジュ（ヌマミズキ科）の他にもクサミズキ（クロタキカズラ科）やチャボイナモリ（アカネ科）などの分類学的に関係のなさそうな種から、カンプトテシンが見つかった。調べてみるとカンプトテシンを生産する、これらの植物のI型トポイソメラーゼにはある特徴があった。

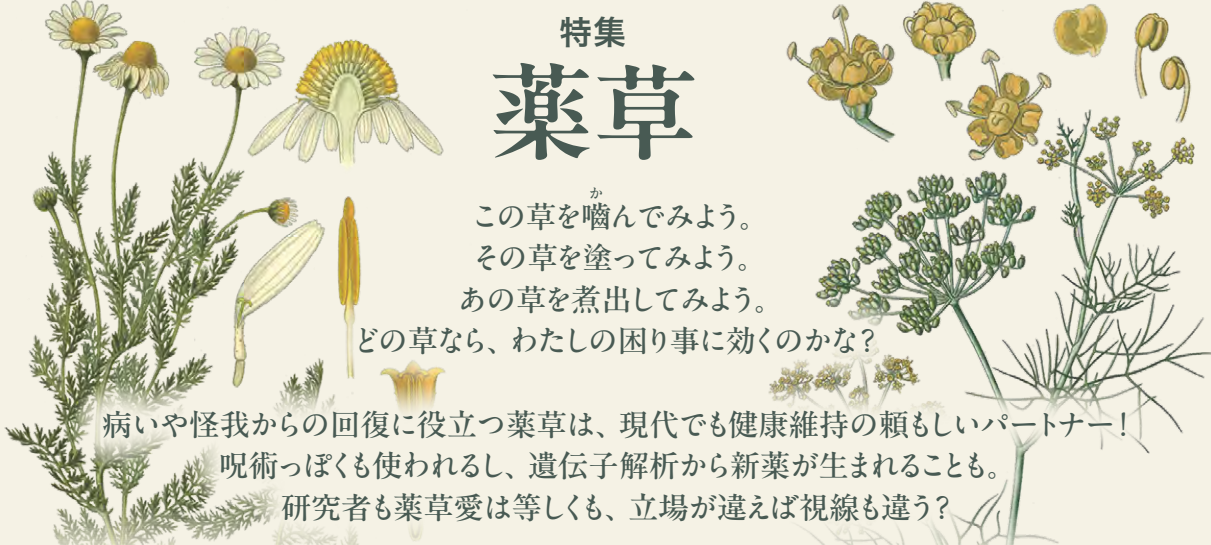
I型トポイソメラーゼは動物にも植物にも共通する重要な酵素で、数百のアミノ酸から成り、その配列も互いによく似ている。カンプトテシンを生産しない多くの生物では、I型トポイソメラーゼの七二二番目のアミノ酸がアスパラギン（N）で、ここにカンプトテシンは結合する。しかし、カンプトテシンを生産する植物では、ここがセリン（S）に代わっているため（表1）、カンプトテシンは結合できず、細胞死を引き起こす「毒」とならない。これらの植物では自分の作るカンプトテシンでは枯れることがないよう耐性を獲得してきたのである。

特集

薬草

この草を噛んでみよう。
その草を塗ってみよう。
あの草を煮出してみよう。
どの草なら、わたしの困り事に効くのかな？

病いや怪我からの回復に役立つ薬草は、現代でも健康維持の頼もしいパートナー！
呪術っぽくも使われるし、遺伝子解析から新薬が生まれることも。
研究者も薬草愛は等しくも、立場が違えば視線も違う？



薬になる毒を作る植物の生存戦略

やまざき まみ
山崎真巳

千葉大学大学院薬学研究院教授

キジュの毒から抗がん剤

毒を薬として使う、その代表例が抗がん剤である。数種の植物が生産する化合物カンプトテシンは、抗がん剤の原料となる。この化合物は一九六〇年代におこなわれた植物成分の大規模探索でキジュという樹木から発見された。カンプトテシンは生物の



上:キジュ(京都府、2019年)
下:キジュのまわりには草が生えない(千葉県、2015年)

細胞内のI型トポイソメラーゼという酵素に結合して細胞死を引き起こす。この酵素は、分裂の盛んな細胞で必要なときにDNAに切れ目を入れて、二重らせん構造を変化させるはたらきをもつ。がん細胞は通常の細胞より細胞分裂が速く、カンプトテシンによってより大きくダメージを受けるので、カンプトテシンを改良した化合物が抗がん剤として利用されるようになった。

ところでキジュはなぜこのような毒を作るのだろうか。職場の緑地にキジュの幼木を植えたところ、キジュのまわりに円形に草が生えない部分があった。キジュの根から土中ににじみ出すカンプトテシンによって近傍の植物の成長が阻止された

日常の

薬草ドリリンク

すぎの よしみ
杉野好美

京都大学大学院博士後期課程

赤瓦の伝統的な平屋が建ち並び、庭にバナナやマンゴーの木が育ち、放し飼いのニワトリが歩く。のどかなジャワの農村に、自転車でガラス瓶の飲み物売り歩く婦人がいる。彼女の姿を見かけると、子どもと



行商人からジャムウを買い飲んでいる村の人びと
(インドネシア 中部ジャワ、2024年)



よい獵犬となるようにタバコの葉の汁を飼いイヌの鼻に入れる儀礼の様子(2011年)



魚がたくさん釣れるようになる薬草。釣竿になすりつけて使う(2009年)

「髪がふさふさになって、黒々とするワストウツ」
 「若々しくかつこよくなる」、「旅先でいろいろな物をもたえるワストウツ」
 「旅先でも生活に困らな



左:ワストウツの樹液を目に垂らし、チカチカとあらわれる幻覚で民族衣装の模様の描き方を学ぶ(2009年)
 右:知り合いに売ってくれるよう頼まれ、収穫してきたワストウツの根株を持つ女性(2012年)
 (写真はすべてペルーにて撮影)

南米ペルーのアマゾンの森に住むシビボの人たちは、薬用植物の利用に長けている。お腹が痛いときにはある植物を煮出した液を飲み、頭が痛いときには別の植物の葉を浸した水で頭を洗うなど、さまざまな植物をさまざまな目的のために使う。外の人にもよく知られているのはアヤワスカという幻覚剤であり、外国からアヤワスカを目当てにくる観光客向けのツアーもある。また、日本でもよく知られているタバコも、「なまける子どもがよく働くように」と、

く働くように」と、

鼻の穴にタバコの葉を入れて「なまけ」の「治療」に用いる。また、シビボは魚が主食といわれるくらい、川で魚をとって食べるので、魚がたくさんとれるよう祈願する薬草もある。薬草利用のなかで、おもしろいのは「ほれ薬」であろう。シビボの人たちのことばでワストウツ（ペルーの公用語のスペイン語ではピリピリ）とよばれるこの草を使つて、意中の相手が自分のことを好きになつてくれるように仕向ける。川で沐浴するときには薬を自分の体になすりつけたり、洗濯のときに意中の相手の服をその植物で洗つたりする。通常、薬用植物は、だれか（大抵は他の村の人）からもらつてきて住居の近くや畑で育てるが、「ほれ薬」となるワストウツを持つていることは秘密にされる。使うときにも、他の人に知られてはならない。他にも「野生動物をたくさん仕留められるようになるワストウツ」



い、などがある。同じ品種で見た目もまったく同じなのに、それぞれの株によつて効き目がちがつており、使う目的が株ごとに決まっている。「こうなつたらいいな」と、ワストウツには、まさにシビボの人びとの理想や求める生活が映し出されている。

アマゾンのほれ薬

おおはし まりこ
大橋 麻里子

京都大学 日本学術振興会
特別研究員 RPD

母親、おばあちゃんが集まってくる。大人はガラスコップでグイッと飲み、子どもはストローでおいしそうに飲む。これは薬草飲料ジャムウだ。
 わたしは初めてジャムウを飲んだとき、「この怪しい飲み物は何？ 味は少しスリッぽい」という感想をもった。しかし、その後長く暮らして、これらの飲み物は新鮮な薬草から作られ、それぞれに効能があり、むかしからジャワの人びとに親しまれてきたことがわかった。
 生物多様性の豊かなインドネシアには、世界の薬用植物の約八割が生育している。そして、数千の島からなる多民族国家ゆえ、各地域や民族で薬草や利用法に違いがある。
 中部ジャワの地元の市場では、独特の香りを放つ薬草が山積みになつて売られている。行商人は、市場からウコンやショウガなど根茎を仕入れ、庭先から新鮮なキンナなど薬物を採取する。彼女は台所でこれらの薬草を潰



上:中部ジャワの市場にて山積みで売られる薬草(2024年)
 中:自宅の台所で、薬草を搾りジャムウを作る行商人(2018年)
 下:行商人が販売している手作りのジャムウ(2018年)

し、絞り、ときに鍋で煮詰めて、ジャムウを作り、売りに出る。子どもに人気があり風邪の引き始めに飲むもの、女性が生理痛緩和のために飲むもの、授乳期の母親が飲むもの、男性や高齢者が健康維持の目的で飲むもの。飲む人は目的や体調、世代、好み、自身の経験から、種類や飲み方を自ら決める。行商人が呼び声をかけると、顧客が家の外に出てジャムウを買つて飲む。常連客が不在なら、玄関先に「いつもの」を置いていく。ジャムウは地域の暮らしの一部であり、ジャワの豊かな自然と生活の知恵の賜物である。



自宅の軒先で行商人から買ったジャムウを飲む女性(2024年)
 (写真はすべてインドネシア 中部ジャワにて撮影)

修道院の薬草魔女

かわにしえりこ
河西瑛里子 民博助教

ドイツ西部の街マウルブロンの外れには、中世から続く修道院がある。その敷地内に軒を連ねる店のひとつの店主が、薬草魔女ガブリエ・ビツケルさんだ。

ほうきに乗ってとんがり帽子をかぶった魔女のエンブレムが目印。店内に並ぶ、袋



修道院の片隅に建つビツケルさんのお店。店内は撮影禁止だった（ドイツ マウルブロン、2015年）

詰めされたカラフルな薬草やハーブティはビツケルさんのお手製だ。布巾や食器、スパイスなどのキッチン用品に加え、石鱈やポストカードなどもそろう。店員さんが「この修道院は世界遺産だから、結構、観光客が来るよ」と教えてくれた。それもあり、この店舗を借りていらしい。

薬草魔女とは、薬草の知識に長けた人びとの一部が使う呼び名だ。ドイツだけでなく、今では日本などにも見つかる。二〇世紀半ばに自らの信仰として魔女を選ぶ人びとがあらわれた流れのなかでとらえられると同時に、現代医療へのアンチテーゼとして、「自然に近い」薬草の利用に関心が高まっているともいえる。

その日不在だったビツケルさんに会うために、後日、彼女が主催する、修道院での薬草園ツアーに参加した。修道院では、古代の文献に基づく薬草や、布教先の異国からの薬草などが、治療に用いるために栽培されてきた。しかし修道院の外にも、「賢い女」とよばれた薬草の知識に長けた女性たちがいて、民間人を助けていた。決められた日時に森に出かけ、呪文を唱えながら、薬草を集めていたという。こうした行為は、



修道院の薬草園。管理も魔女のビツケルさんが任されている（ドイツ マウルブロン、2015年）



ビツケルさんのお店で購入したハーブティ。左は「ヒソップ」という薄荷の一種らしい。かしこまりなくなる味だった。右は「色とりどりのハーブ」と書いてあるらしい。キクのような花びらの味が強かった（ドイツ マウルブロン、2015年）

薬草をめぐるフィールドワーク

いとう みちほ
伊藤美千穂

国立医薬品食品衛生研究所 生薬部 部長

教会から呪術的と非難され、彼女たちはキリスト教に反する「魔女」として迫害されることもあったらしい。薬草をめぐる、修道院と「魔女」とされた人びとは対立していたのである。

修道院と薬草魔女。かつては相容れなかったであろう両者は現代、観光化による集客と収入という共通項を得て、共存できている。

フィールドワークとは、研究者の方から研究対象に近づいていって極めて近くで情報収集する手法のことである。国内外を問わず現場に赴く現地調査のほか、畑仕事という意味もある。筆者はこの両方のフィールドワークを軸に研究室での各種の実験を組み合わせ、さまざまな薬草について研究してきた。研究内容は、その成分の化学構造や成分を作る生合成酵素、またそれらを制御する遺伝子についてであったり、

成分やエキスを実験動物に投与して薬効について研究したり、という薬学らしいものもあるが、それが薬草として使われてきた歴史的背景をインタビューで探り、



ビツケルさんの本は、日本語にも訳されている
ガブリエ・ビツケル著『薬草魔女のナチュラルライフ』
（林真一郎監修、林真一郎・畑澤裕子訳、東京堂出版、2002年）



峠の水場の薬草売りたち。少年少女が季節の野草を摘んで売る。地域特産の種が多かった（ウズベキスタン、1997年）



山中の小さな村でインタビュー。自宅に備蓄してある薬草を出してきて見せてくれた。袋の中身は家族みんなが使える胃腸薬の薬草だった（イラン、2007年）

薬草は誰のもの？

なかぞら もえ
中空 萌

筑波大学 教授

るようだが、多くの場合はそうではなく、ヒトがいる場所で実施する。なぜなら、疾病治療に使える植物が生えていたとしても、それをヒトが使わなければ薬草にはなれないから。「薬」という概念はヒトの生活のなかにあるのである。だから、薬草を研究していると、ヒトの文化に対する考察が必ず必要になってくる。

その薬草について知りたい内容を追究しようとするとき、知りたい内容に直結するところに集中して井戸を掘るように研究するのが一般的だが、フィールドワークを軸に研究を展開すると、薬草が真ん中でその周りを研究者がぐるぐるまわりながら情報やモノを薬草とやりとりする感じになる。それは螺旋階段を登って行くようで、ぐるっと一周して同じところに来たつもりでも、当方には新たな知見が蓄積していて、見る角度も変わり、研究対象の薬草はもはや以前と同じには見えない。そういうときはちよつと嬉しくて高揚した気分になる。この研究方法は井戸掘り型より非効率的であることは明らかだが、研究対象の全体像を知ることでは他人にはできなかったことを成せる場合も多く、ヒト臭い薬草にはぴったりだと思っている。

「村の薬局」とよばれる木

インドで「村の薬局」とよばれる、ニームという木がある。人びとはその葉や実を



薬草収集をおこなうヴァイディヤ(インド、2011年)

心臓病、糖尿病、関節炎などあらゆる病気の治療に役立ててきた。木には、ほうきと冷水で熱を冷まし、人びとを天然痘などの疫病から守るシータラー女神が宿っているという。このニームの名前が世界中に知れ渡ったのは三〇年ほど前。アメリカの大手製薬企業がニームの葉から農薬に使えるオイルを抽出する方法を自身の発明であるとして、特許を取得したことがきっかけだった。それに対してインド政府やNGOは、その方法は古くからインドで知られているやり方で、それを真似した一企業が利益を独占するのはおかしいと訴えた。結局訴えが認められて、特許は取り消しとなった。

薬草の豊富な地域で暮らす人びとの知恵をもとに、薬やそのほかの商品を開発する——そのこと自体はそれほど新しいことではない。例えば(我々にとっては薬ではないけれども)タバコはコロンブスが南米先住民が栽培し、その葉を巻いてくゆらせてい

るのを観察し、真似したことで生まれた嗜好品だ。わたしの友人のインドの植物学者は「伝統医療っていうのはいつも近代科学より前にあるものさ。重要な薬草を見つけてるのも、いつも伝統医療だ」と言って、植物採集のたびに道端で出会う民間の「専門家」に話を聞いていた(写真は、サードゥとよばれるヒンドゥー教の巡礼者)。

利益か、慈悲か

そんななか最近新しく問題になっている

のは、ニームの例にあるように、薬草に対する人びとの経済的権利をどう考えるのかということだ。人びとの薬草についての知恵を参考にした企業や科学者が莫大な利益を得る、それに対して当の人びとに何の利益も還元されないのはおかしいのではないか。そういう声が世界中で高まってきたのだ。

一九九二年の生物多様性条約は、科学者が伝統医療をもとに薬草から発明をおこなうときにはきちんと人びとに事前説明をしたらうで、利益を適切に配分しなければい

薬草を「資源」とみて利益の公正な配分を考える世界と、薬草を媒介に慈悲と奉仕のつながりをつくりだす世界。異なる正しさのあいだを行き来しながら、議論はまだまだ続いている。シータラー女神は、熱冷ましに苦労しているようだ。



上:治療をおこなうヴァイディヤ(右)(インド、2011年)
下:広範な地域の薬草に詳しいサードゥ(左)から話を聞く筆者の研究協力者である植物学者のジョーシー氏(中央)(インド、2010年)



右：ひよるひよるになって冬を耐えるフェネル、別名茴香(ウイキョウ)
左：出典『ケラーの薬用植物』(Missouri Botanical Garden, Peter H. Raven Library蔵)

他の薬草がバツタに食べられて全滅しても、生き残って越冬していく。細い葉と細長い茎がぐらつき、バツタが安定して乗れないらしい。とれたての葉のお茶は草っぽい甘みを、乾燥させた葉のお茶は落ち着いた甘みを楽しめる。

(河西瑛里子)



はかな
儂げなのにしぶとい
フェネル

セリ科ウイキョウ属
学名： *Foeniculum vulgare*



右：クララの根は生薬「苦参」として利用される
左：クララの花にやってきたマルハナバチ

葉を噛むとくらくらするほど苦い。根は生薬「苦参^{くしん}」。苦味の正体はマトリンなどのアルカロイドで、ストレス性胃潰瘍抑制作用などが報告されている。絶滅危惧種のオオルリシジミは苦いクララを食草とする。

(山崎真巳)

教えて！ 押し薬草



か
噛むとくらくらする
クララ

マメ科クララ属
学名： *Sophora flavescens*



右：形態も精油成分(におい)もさまざまなタイプがある
左：実顕顕微鏡でみた紫蘇の葉の裏面(背軸面)。黄色い粒粒が精油が蓄積した腺鱗(せんりん)

紫蘇^{しそ}は香味野菜として有名だが、赤紫蘇^{あしむす}でにおいがいいものは、漢方で「氣」を巡らせる薬としても使われる。そのにおいは精油由来で、日本に馴染み深いにおいの他にじつはたくさん種類があって、どのにおいになるかは遺伝的に制御されている。

(伊藤美千穂)



「氣」を巡らせる
シソ

シソ科シソ属
学名： *Perilla frutescens*



右：ジャムウのおもな材料のひとつバンウコン(クンチュル)
右図：出典ピエール=ジョゼフ・ルドゥーテ『ユリ科植物図譜』
(Missouri Botanical Garden, Peter H. Raven Library蔵)
左：アレンジ版ジャムウ、ミルク入りブラス・クンチュル(Yuli Widiyastuti撮影)

推しのジャムウはクリーム入りブラス・クンチュル。バンウコンと米粉を主原料にしたジャムウにクリームが加わっている。薬草独自の味が緩和され濃厚な甘さが楽しめる。近年、ジャムウをアレンジした飲み物が人気だ。

(杉野好美)



伝統健康飲料ジャムウに欠かせない
バンウコン

ショウガ科バンウコン属
学名： *Kaempferia galanga*



右：海岸の岩場に生えるボタンボウフウ
左：岩場にあるアマミノクロウサギの糞(ふん)

最近調査している奄美大島の海岸に生えるボタンボウフウ(長命草)。その根や葉が風邪や咳止め、滋養強壮に用いられるが、特別天然記念物アマミノクロウサギの好物でもある。「薬草は誰のものか」という問いは、人間同士だけでなく、人間と他の動物のあいだでも生じている。

(中空萌)



アマミノクロウサギも噛る
ボタンボウフウ

セリ科カワラボウフウ属
学名： *Peucedanum japonicum*



右：市場では乾燥させた葉をまとめた状態で売られている
左：出典『ケラーの薬用植物』(Missouri Botanical Garden, Peter H. Raven Library蔵)

生態系の豊かなアマゾンには人間の皮膚に寄生するイモムシがいる。細い枝を使って取り除こうとするが、奥に入り込んでしまったときはタバコの出番だ。タバコの煙を傷口から吹き込むと嫌がったイモムシが出てくる。また、飼いたいイヌが動物をつかまえる(よい猟犬となる)よう、人間の子ども同様に葉の汁を鼻に入れたりして用いる。

(大橋麻里子)



一服するだけじゃない
マルバタバコ

ナス科タバコ属
学名： *Nicotiana rustica*

みんなく 回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんなくホームページ
催し物のご案内
<https://www.minpaku.ac.jp/event/>



各イベントについて、
詳しくはホームページを
ご覧ください。

観覧料改定のお知らせ

2025年6月19日(木)から、本館展示観覧料を左記のとおり改訂いたします。なお、特別展示観覧料はその都度、別に定めます。ご来館者のみなさまにはご負担をおかけしますが、ご理解いただきますようお願いいたします。

一般	大学生
580円	250円
無料	無料

一般	大学生
780円	340円
無料	無料

◆2025年6月19日(木)から
各種割引等につきましては、みんなくホームページをご覧ください。

みんなく創設50周年記念特別展

民具のミカタ博覧会
—— 見つけて、みつめて、知恵の素 ——
本特別展では、日常の生活で必要なものとしてつくられ、使用されてき

た民具について、くらしのなかの美の造形として紹介します。

会期 6月3日(火)まで
会場 特別展示館



点と線の美学

アラビア書道の軌跡
会期 6月17日(火)まで
会場 本館企画展示場



■関連イベント

みんなく映画会
人もモノもつづるいゆく時代に、
点と線は変わるぬ価値を描く
「エジプト映画『フォトコピー』」

日時 6月8日(日)13時30分～16時
(受付・開場12時30分)
会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)(定員350名)
上映作品 「フォトコピー」(エジプト、2017年)
解説 相島葉月(本館 准教授)

参加費 要展示観覧券(一般580円)
※イベント参加費は不要
※事前申込制(本人を含む2名まで、先着順)
※事前申込の方へ、当日12時30分から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場していただきます。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】

▼友の会先行受付
5月2日(金)まで 定員70名
お申し込み先
国立民族学博物館友の会
(千里文化財団)
一般受付 6月4日(水)まで



© Red Star Films

みんなくミュージアムパートナーズ(MMP)のワークショップ

あそびの広場2025
「みんなくをあそぼ!」
日時 5月5日(月)10時～16時
(最終受付15時)
会場 本館1階エントランスホール

訃報 菅瀬晶子准教授

本館の菅瀬晶子准教授がさる3月31日に死去いたしました。菅瀬准教授は、中東・東地中海地域の宗教的マイノリティをめぐる研究を進め、特に、パレスチナやイスラエルにおけるキリスト教徒「コミュニティ」の文化や、異なる宗教の共存のあり方に関する研究は、国内外で高く評価されています。また、日常の料理や食事の風景をとおして、エコシテイやジェンダー、紛争や地球環境の課題にまで視野を拡げた食文化研究を進めました。遺作となった『ウム・アザルのキッチン』(福音館書店、2024年)は、2025年3月のポロニヤ国際児童図書展で、持続可能性をテーマにした150の傑出した図書の1冊に選ばれました。現在開催している企画展「点と線の美学——アラビア書道の軌跡」ではアラビア文字を切り口として、人類共生のあり方や中東と日本との繋がりを提示することに尽力しました。謹んで哀悼の意を表します。

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
参加無料、申込不要(定員400名)

第557回
5月17日(土)13時30分～15時(13時開場)
民具のミカタ博覧会ができるまで
——EEMコレクション×ムサビ・コレクション——
講師 日高真吾(本館 教授)
野林厚志(本館 教授)
加藤幸治(武蔵野美術大学 教授)



米国最北の村ウットゥキアグヴィク(2022年)

みんなくウィークエンド・サロン——研究者と話そう

※定員なし(ご自由に参加いただけます)
※申込不要、要展示観覧券(一般580円、会場が特別展示館の場合は一般880円)
※イベント参加費は不要

5月4日(日・祝)14時30分～15時
アラビア書道を刻む
——装飾タイルとモザイクタイル——
話者 黒田賢治(本館 助教)
会場 本館展示場(ナビひろば)

5月11日(日)14時30分～15時30分
パレスチナ地名刺繍タペストリーについて——菅瀬晶子を偲ぶ
司会 山中由里子(本館 教授)
話者 相島葉月(本館 准教授)
会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)
※定員400名(当日先着順)
※この回のみ展示観覧券不要

5月18日(日)14時30分～15時15分
アラビア文字、広まる。
変わる。消える。
話者 吉岡乾(本館 准教授)
会場 本館展示場(ナビひろば)

5月25日(日)14時30分～15時15分
連想検索と民具のミカタ
話者 丸川雄三(本館 教授)
会場 特別展示館

6月1日(日)14時30分～15時
民具の3D撮影の実演解説
話者 高科真紀(本館 助教)
大石啓明(武蔵野美術大学 准教授)
会場 特別展示館

友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先 国立民族学博物館友の会(公益財団法人千里文化財団)
電話 06-6877-8893(9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会講演会

参加形式：会場もしくはオンライン配信
友の会会員：無料
一般(会場参加のみ)：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第560回 5月3日(土・祝)13時30分～15時
イザベラ・ウフマンと
レターリアリティの世界
講師 永井正勝(筑波大学 教授)
相島葉月(本館 准教授)
会場 本館第5セミナー室(定員70名)
イザベラ・ウフマンは、絵もテキストとしてとらえた古代エジプトの人々の思想を継承する現代アートの作家です。本講演会では、絵

画でもありテキストとしても読めるウフマン作品の世界観を解き明かします。

第561回 6月7日(土)13時30分～15時
昭和30・40年代の
日本民族学界との出会い
——ヴィーンから奄美と阿蘇へ、そして民博へ至る——
講師 ヨーゼフ・クライナー
(ボン大学 名誉教授)
会場 本館第5セミナー室(定員70名)

1958年にヴィーン大学民族学科に入学し、恩師アレクサンダー・スラヴィクのもとで岡正雄、石田英一郎、柳田國男、折口信夫の学説を学び、学友の住谷一彦と議論を重ねました。日本留学中は東京大学東洋文化研究所に籍を置き、南西諸島の調査に参加。

沖縄で佐々木高明氏と出会い、梅棹忠夫氏の民博ビジョンに感銘を受けました。この経験を皆様と共有できれば幸いです。

会員交流のための企画 中牧先生の理事長サロン

日時 6月7日(土)15時30分～16時30分
会場 本館第5セミナー室(予定)
事前申込制

友の会へのご要望や研究分野へのご質問に千里文化財団の理事長・中牧理事長が答えます。今回は、長年にわたり文化人類学および日本学の研究に取り組まれてきた、ヨーゼフ・クライナー先生をお迎えし、名誉教授・久保正敏先生にもご同席いただきます。

本の紹介

西秋良宏、野林厚志 編
『パレオアジア——新人文化の形成』
新泉社 7,150円(税込)

ネアンデルタール人やデニソワ人ら旧人たちが生きていた時代のアジアで、新人たちは、いかに適応し、旧人集団と交替したのか。太古の交替劇を過去と現在の文化の証拠をもとに考察します。



に、孤児たちを取り巻く社会・文化的環境と、子どもたちのエージェンシーに関する研究をおこなっている。
池邊智基 助教
(人類文明誌研究部)
京都大学大学院で博士号を取得。民間企業勤務。京都大学アフリカ地域研究資料センター特任研究員。日本学術振興会特別研究員PDを経て現職。西アフリカのセネガル共和国におけるイスラーム教団を対象に、現地語のウォロフ語で語られる口頭伝承と、アラビア語や公用語フランス語で書かれた文書との相互関係についての文化人類学的研究に取り組んでいる。

弦楽器(エレクトリック・ギター テスコ ET230)

標本番号 | H0230739

地域 | 日本(製作)

展示場 | 音楽



✦ 推しコレポイント ✦

60年代の和製エレキブームの申し子！
ギブソン、フェンダーにはない音色と
デザイン



わたし、エレキの味方です

つつみ くにひこ
堤 邦彦 京都精華大学 名誉教授

テケテケサウンドの元祖

半世紀前の東京神保町は国産エレキギターの聖地であった。すずらん通りの古道具屋Sには、鷹の剥製や基盤と一緒にたくさんのエレキが天井から吊るされていた。みんぱくの展示場にあるのと同じテスコ社製ET230もあった。アメリカの老舗メーカー、ギブソンやフェンダーが高嶺の花(高い!)だった時代、手に入る国産の量産品はギター小僧にとって無二の親友だった。テスコがわたしをあのころに引き戻す！

テスコのエレキは独特の金属音がした。だからテケテケサウンドはテスコに限る。この音色の成り立ちにはテスコ社の歴史が関係する。1946年にアライ音波研究所の名でスタートした当時の創設メンバー金子篤雄、橋本博義は、昭和のはじめに流行したハワイアンバンドでスティールギターを担当していた。ハワイアンの演奏に適した硬くて歪まないピックアップ(注)を目指した結果が、あのテ

ケテケになったのだろう。70年代のフルボリュームにはない発想である。

さらにギターデザインにもテスコらしさがみなぎる。ギブソンの伝統的なピックガードがプラスチック製なのに対して、アルミの艶消し・光沢のツートン縞模様は斬新であった。古色を廃した新時代のエレキの誕生である。ピックアップを2つから4つに増やすタイプもめずらしい。1960年代のテスコはギター界のかぶき者であった。

エレキ文化の光と影

1961年にザ・ベンチャーズが来日し、66年にザ・ビートルズの武道館公演がおこなわれたのを機に、60年代後半の日本はエレキブームに沸いた。65年の「エレキの若大将」では、加山雄三、寺内タケシがエレキ片手に大暴れ！ テスコはこの映画の協賛に名を連ねている。

一方、熱狂する若者の姿に「エレキ亡国論」が叫ばれたのもこのころである。1965年には評論家細川隆元の提言を受けて足利市教育委員会が教育現場からのエレキ追放を決定すると、新聞紙上に「エレキは不良」の見出しが躍るようになった。赤シャツ、ジャックナイフ、エレキは悪漢のシンボルらしい。

2025年の今、フェンダーのソフトケースを肩に阪急電車に乗る女子高生を見ると、半世紀前の心の声がよみがえる。「わたし、エレキの味方です」。



筆者のコレクションより。
右はギブソン社製トリニ
ロベス1967モデル、2ハン
パッカーのマイクとプラス
チック製ピックガード。左
の日本製1960年代エレキ
は金属製ピックガードにシ
ングルコイルの4マイク
(神奈川県鎌倉市、2025年)

(注)ピックアップ……エレキギターの弦振動の音を拾い、電気信号に変換する部品。
ボディに複数配置し、多様な音色に切り替えることができる。

はじまりは、太陽のせい……

トランシルヴァニア民族誌博物館 (ルーマニア クルージュ=ナポカ)

しんめん みつひろ 新免 光比呂 民博 名誉教授

まだわたしが学生だったころ、はじめてトランシルヴァニアを訪れたときのことだ。見知らぬ町であるクルージュをさまよい歩き、夏の強い日差しに疲れ、休むところを探しているうちに古めかしい建物の前に来た。看板には民族誌博物館とある。ちょうどいい、なかに入ってみよう。

建物も古いが館内の展示もまた年季が入っている。そもそもルーマニアで最初の民族誌博物館ということで、一九二二年設立、一九二三年一月一日に正式に運用が開始されたという。郊外には野外博物館も付設されている。そのころはまだ民族学にもさほど興味がなかったが、館内を歩いているうちに、展示されている資料がしだいに気になっていった。木製のさまざまな生活道具、子どもの素朴なおもちゃ、そしてトランシルヴァニア一帯の村々の民族衣装。まだすれていなかったわたしに、色鮮やかで多彩な民族衣装はとても魅力的だった。女性の衣装は白いブラウスに年齢に応じた色違いの巻きスカート（ザディエ）とベストが定番だ。男性は白いシャツにシンプルなベストをまとう。やがて調査地で民族衣装を身にまとった



丘から望むクルージュ(1994年)



館内に展示されていた民族衣装(1994年)



村の春祭り(1994年)

若者の舞踏に心惹かれるようになる。そういえば、この町クルージュは、別名コロジュヴァール、クラウゼンブルグだ。それぞれハンガリー語とドイツ語であることからわかるようにハンガリー人、ドイツ人が居住してきた。さらにロマ（ジプシー）の人たちも。それぞれの民族がまたそれぞれのスタイルの衣装をもっている。やがて時は流れ、ルーマニアを調査のために訪れるようになると、この民族誌博物館がわたしの滞在の受け入れ先となった。さらに国内の調査に出かけるときには、博物館からの紹介がとても助けになった。どの地方の博物館に行っても、温かく親切に接してもらった。経済的な苦境にあった独裁的な社会主義体制下で、さまざまな制約が多い生活を支えたのは人のつながりだった。連携などことさらにいわなくても人がつながっている。それがルーマニアの博物館だった。

トランシルヴァニア民族誌博物館はクルージュ=ナポカ国際空港から電車で約40分。カルパティア山脈に囲われたトランシルヴァニア地方の中心部にある。公式サイト <https://www.muzeul-etnografic.ro/>

エンジンが変える森の日常

河合文^{かわいあや}

東京外国語大学 准教授

風をうけて進みながら兩岸の花芽や若葉を眺め、テナガザルやミズオトカゲを探す。川でくつろぐゾウに出

る沈香^{じんこう}（ジンチョウゲ科樹木の特殊な樹脂で香料の原料になる）や高級魚など森で得た資源を町の仲買人にも届けられる。道路が開通した現在、経済活動に不可欠な乗り物となっている。

むかしからの移動手段は徒歩と筏^{いかだ}。最近
はボートとバイクが加わり、日常的に利用
される。マレーシア半島部、タマンヌガラ
自然公園近くに暮らす狩猟採集民パテツの
話である。

熱帯林を生活圏にしてきた彼らは、プラ
ンテーションの拡大とともに政府が設置し
た村を利用するようになり、現在は村の生

活と森のキャンプを組み合わせて暮らす。
森が減っても、狩猟や採集、川での漁撈^{ぎょうらう}
など、水陸を移動して食物を得るスタイルは

変わらない。そこで活躍するのが種々の乗
り物だ。

長く続いた雨が減り、晴れの日の増えた
二月末、川の流れが落ち着くと森への移動
が始まる。ヤマハやホンダのロゴ入り船外機
をボートに取り付け、プランテーション村で
買ったペットボトル入りガソリンをセットす
れば準備完了。上流へむけて出発だ。

が見えたらすぐにエンジンを切って遠ざか
るのを待つ。川を知り尽くした彼らは、岩
や瀬にあわせてエンジンをゆるめたり、ふ
かしたりしながら巧みに遡る。短距離なら
竹の筏がよいが、より上流へ行くならボー
トが便利だ。エンジンは人力の何倍もの速
さで移動できる。

いっぽう陸の移動に欠かせないのがバイ
ク。アップダウンの激しい環境に適した乗
り物だ。小回りがきき、プランテーション
内の小道にもうってつ

け。雨でぬかるみ、車
だと車輪が滑って登れ
ない坂道も、草の茂る
脇を登っていける。吹
き矢を担いでバイクに
乗れば獲物の豊富な遠
くの森にたどり着け、
また彼らの収入源であ



ただ、こうしたエンジンを動力
とする移動は、地面のアップダウ
ンを感じにくい。彼らの会話には
「のぼる・くだる」ではなく、バイ
クやボートで「行く」という表現
が増えている。これは、かつては
平地を移動する際にのみ使われて
いた語である。エンジンの利用は、
彼らの身体感覚も変えているよう
である。

上：上流へむかうボート。筆者の寝床用ゴザが積んである（2024年）
下：バイクはどの村でも見かける（2019年）
（どちらもマレーシア クランタン州）

被災地の空を飛び交うツバメの未来

宮原 修 みやはら おさむ
インドネシア公立タドゥラコ大学 特任講師



さえずりがあふれる街

二〇二三年一月、新型コロナウイルスによる入国制限が解除された直後に、インドネシア・スラウェシ島中部のパル市の空港に降り立った。二〇一八年に発生したスラウェシ島地震からの復旧は、まだ道半ばのようだった。隣接するバサンカユ市へ移動すると、「ピーピー」チッチッチ「という鳥のさえずりの出迎えを受けた。そのさえずりは、街のあちこちにあるスピーカーから流れる人工音だった。空中を飛び交うツバメ（正確にはアナツバメ）を、現地語で「ルマ・ワレット」、字義どおり訳すと「巣家」である人工のねぐらに招き入れるために開発されたものだ。次々にダビングして流されるので、

いまやこの街のBGMのようになってた。



ツバメが巣を作る「巣家」の建物。外観は民家やビルなどさまざまで、内部は洞窟を模した造りにしている（パサンカユ市、2023年）

仙薬から高級食材へ

元来、ツバメは断崖絶壁の洞窟内に巣を作り、その巣は中国の歴代の権力者が「南洋」から取り寄せた森の産物で、古くは不老不死の仙薬を求めた秦の始皇帝が、近世では紫禁城で贅の限りを尽くした西太后が、そして近代では国家権力の中核「中南海」を制した詰め襟人民服の覇者たちが賞味した。そして、中国や各地の華人社会を中心に、贈答品や高級食材として珍重されてきたのである。

鄧小平後に躍進した中国経済で、ツバメの巣は「投機商材」と化してその増産が期待されることとなり、ツバメの生息地のひとつでムスリムが多数を占めるインドネシアのスラ



スラウェシ島地震で被災したパル市（2018年、タドゥラコ大学 スキマン・ヌルディン教授提供）

ウェシ島中西部に、変革をもたらした。

モスクとツバメ

「ファジュル」（日の出前におこなう、その日最初の礼拝）を呼びかけるア

らそのツバメは巣に戻らなくなるからである。

日没時におこなう「マグリブ」のために人びとはモスクに集い、その日一日が安全だったことをアッラーに感謝する。礼拝の後、モスクでは「巣家」を持つオーナーたちのあいだで情報交換がなされる。同じ条件（人工のさえずり）であるにもかかわらず生じた収獲量の差は、アッラーへの帰依の度合いだと評するイマーム（指導者）がいる。ツバメの巣事業で得た利益の一部をモスクに寄付するよう促すためである。震災で壊滅的な打撃を受けた地域であるにもかかわらず、モスクだけは立派なのが頷ける。

巣の採取は虐待？

「巣家」の調査を始めて一年が経つころ、オーストラリアに住む旧知の厳格なヴィーガンから、巣を採取する

のは動物虐待行為だと抗議を受けた。これは忠告であり、この後には「警告」が待っているという。

ツバメの巣は、親ツバメの唾液成分で塗り固められて作られる。できた巣に産む卵は一個で、産卵から孵化して三カ月でヒナは巣立つ。旅立った後の巣は再利用されることなく放

置されるが、人間がそれを採取すればそこにはスペースができ、また新しい巣が作られ、次世代のツバメが利用するというサイクルが始まる。採取された巣は、ヒトの手とピンセット、拡大鏡を使ってクリーンルームで掃除され、市場へ出荷される。ツバメの巣産業は、このようにツバメと人間の共棲のエコロジーサイクルで成り立っている。あのヴィーガンにこの説明をしてからかなり時間が経っているが、「警告」はまだ届いていない。

地方都市における震災からの復旧の困難さは、日本の能登半島もスラウェシ島も共通している。地場



上：クリーニング作業の様子（パサンカユ市、2024年）
右：ツバメの巣（2025年）

産業の活性化は、その地で生きる人に希望を与え、復旧にもつながっていく。被災地を飛び交うツバメがその未来を見据えている。



巣の採取作業（パサンカユ市、2023年）



モンゴルの「薬肉」文化

しまむら いっぺい
島村 一平 民博 教授

^{ちまた}巷でよく耳にする「ヘルシー」。野菜が多く使われた料理に対する定番表現だ。野菜はヘルシー、すなわち「体に良い」。自然由来の薬といえば「薬草」。世のなか、体に良いものはすべからく植物ってわけだ。

ところがモンゴル。人びとは悠久のむかしより大草原で家畜とともに暮らしてきた。そんな彼らにとって肉こそが健康食である。モンゴルでフィールドワークをしていると、とにかく体にいいからと言って肉を勧められる。「モンゴルの羊肉や牛肉は自然の草を食べているので体にいいんだ」。驚いたのは、「狼の肉は肺の病気にいいんだ」。もはや薬草ならぬ「薬肉」文化である。

モンゴルでは、肉は大きく「熱い性質の肉」「ぬるい性質の肉」「冷たい性質の肉」の3種に分けられる。馬肉は「熱い性質の肉」だ。脂肪の融点が低く、凝固しにくいからだそうだ。とりわけ寒い冬や冷え性にはぴったりなのだという。一方、ヤギ肉は「冷たい性質の肉」だ。炎症を抑える働きがあるといわれている。「ぬるい性質の肉」の代表格がタルバガン(シベリア・マーマット)の肉。タルバガンは、ペスト菌を媒介することで知られるが、モンゴル人にとっては脂身の多いごちそうだ。その肉は滋養強壮の効果があるほか、健胃薬になるといわれている。またタルバガンの脂身は火傷や凍傷の塗り薬となる。少し面白いのがハリネズミ。肉が冷え性に効くだけでなく、その血はなんと毛生え薬になるのだという。モンゴル人に髪の毛の

薄い人が少ないのは、よもやハリネズミの血のせいではあるまい。

さてそんな「薬肉」のなかでもっとも有名なのが羊肉だ。「薬肉」専門家ジャムスラン氏は「すべての部位が魔法のような薬だ」と激賞している。たとえば、モンゴルでは風邪などで食欲がないとき、シュルとよばれる羊肉のスープを食する。細かく刻んだ羊肉に刻みニンニクを加えて煮る。味付けは塩のみ。

むかし、風邪で熱を出したとき、ステイ先のお母さんがシュルを作ってくれた。正直、シュルよりおかゆが食べたかった。しかし我慢して食べていると、体に力がみなぎってくるではないか。それ以来、わたしは熱が出て食欲がないときは、肉のスープを作って飲むことにしている。みなさん、肉もヘルシーですぞ。



タルバガンの石焼き料理。焼け石を詰めて蒸し焼きにした後、バーナーで炙って仕上げる(モンゴル国 ドルノド県、2000年)

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発行人 山中由里子
編集委員 樫永真佐夫(編集長) 河西瑛里子
黒田賢治 中川理 奈良雅史 松本雄一
制作・協力 公益財団法人 千里文化財団
印刷 株式会社 研文社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係
にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



『月刊みんぱく』は 国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。



お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

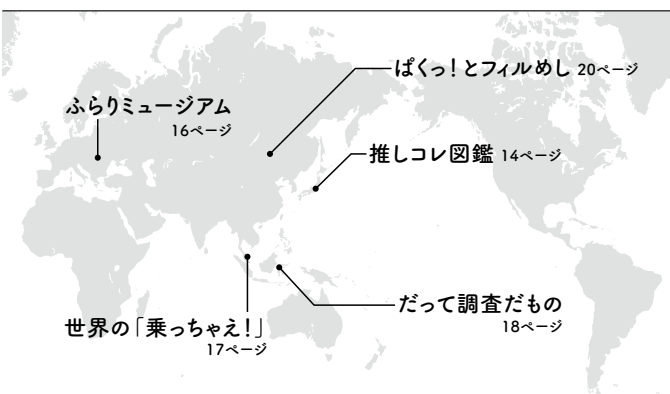
電話 06-6877-8893(平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/



友の会

今月号の地図



編集後記

ベトナム山間部で村の暮らしを調査していると、現地の植物を調べるために良い図鑑が必要になる。探してみてもなかったのだが、もっとも要望を満たしてくれるのは、なんと薬草事典であった。ベトナム戦争中の1960年代にも刊行が相次いでいるのは、戦地で必要だったためだろう。身近な植物はほぼ網羅されていて、植物学的解説から、その薬効と成分、伝統医療における利用法まで記されている。われわれの身の回りに無用な草木などない、と知った。気づいていないだけで、人はいわば薬草のジャングルのなかに生きているのだ!

ということは、肉食だって滋養効果が大いから、島村一平さんのエッセイのとおり、薬「肉」もあってしかるべき。また、例えばミミズだって古くから解熱作用が知られているし、伝統医療で使われる虫は他にもいるから「薬虫」も。ということで、次号特集は「薬チュー」文化……いや、やりません!(樫永真佐夫)



次号の予告 6月号

特集「禁酒のイスラーム」(仮)

国立民族学博物館 National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

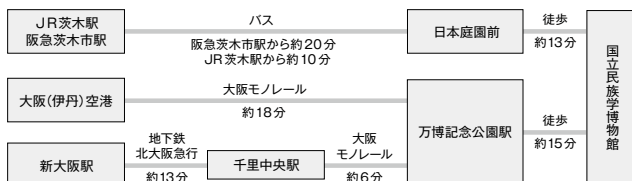
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は直後の平日)
年末年始(12月28日~1月4日)

観覧料 一般 580円/大学生 250円/高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

<https://www.minpaku.ac.jp/>





国立民族学博物館友の会機関誌

『季刊民族学』192号 ISBN 978-4-915606-95-3

ダースレイダー[責任編集]

[特集] ヒップホップ——逆転の哲学

ヒップホップは逆転の哲学

ダースレイダー

ホームをみずから選びとる

——台湾原住民のヒップホップ

小幡 あゆみ、Mr. 磨

Sorry ここは香港だ

——サイアクな街に響くヒップホップ

の快樂

小栗 宏太

韓国ヒップホップ1989-2024

——独自のアイデンティティと日本ヒップホップ
との関係性を中心に

キム・ボンヒョン

ヒップホップ異郷紀行

ダースレイダー

多層都市ムンバイのヒップホップシーン

——エンターテインメント、エンパワーメント、
ポップカルチャー、そしてストリートカルチャー
軽刈田 凡平

辺境の地でさまざまな言語でヒップホップを
武器に闘うラッパーたちの姿に迫る

ラップにこめる霊力と世界の変革

——カメルーンのラッパーたち

矢野原 佑史

辺境のフィメール・ラッパー

——スポットライトを奪い取る

村本 茜

日本語でラップするということ

ダースレイダー／HUNGER／

莊子it

ミュージアム
・ショップ
にて販売中

定価

2,750円(税込)

友の会会員価格

2,200円(税込)